



|                                                                                           |         |
|-------------------------------------------------------------------------------------------|---------|
| <br>Data | 2026-16 |
| 監督・脚本・編集: 藤元明緒                                                                            |         |
| 出演: ムハマド・ショフィック・リア・フッディン / ソミーラ・リア・フッディン                                                  |         |
|                                                                                           |         |
|                                                                                           |         |
|                                                                                           |         |
|                                                                                           |         |
|                                                                                           |         |
|                                                                                           |         |

## 👁️👁️ みどころ

友人の紹介によって、藤元明緒監督・脚本のデビュー作『僕の帰る場所』(17 年)への出資を即断したのは 2014 年 11 月のこと。第 2 作『海辺の彼女たち』(20 年)に続く、第 3 作たる本作まで私の出資は続いているが、本作は 2025 年の第 82 回ベネチア国際映画祭のオリゾンティ部門で審査員特別賞を受賞! 大阪で開催された本作の試写会では、記念のブロンズ像を持った藤元監督と共に記念撮影を! 受賞おめでとう! よく頑張ったね!

2026 年 3 月末の今、世界中の目はイラン紛争(戦争?)とペルシャ湾のホルムズ海峡に釘付けだが、あなたは「世界で最も迫害されている民族の一つ」と言われているロヒンギャ難民の実態を知ってる? 中学生の時に観たルネ・クレマン監督の『禁じられた遊び』(52 年)は、2 人の子役の存在感と個性が際立った悲しい映画だったが、本作に見る、5 歳の弟シャフィと 9 歳の姉ソミーラの存在感と個性は如何に?

「故郷を追われた難民の幼い姉弟が、家族との再会を願い、命がけで国境を越えていくー」という暗い暗いストーリーの本作から、あなたはどこにどんな希望を見出すだろうか?

—— \* —— \* —— \* —— \* —— \* —— \* —— \* —— \* —— \* ——

## ■□■ 出会いと出資から 11 年半! 藤元監督は大成! ■□■

私が弁護士兼映画評論家として『SHOW-HEY シネマルーム 1』を出版したのは、自社ビルに移転した直後の 2002 年 6 月。以降、弁護士業は順調に推移し、それなりの収入、蓄えができてくる中、友人・知人の映画製作への応援・出資をするようになった。そんな状況下、藤元明緒監督・脚本によるデビュー作『僕の帰る場所』(17 年)の企画を聞き、出資を要請され、それを決意、実行したのは 2014 年 11 月のことだ。もちろん、藤元監督

とは何の面識もなく、同作の企画も文字通り「海の物とも山の物ともわからない」ものだったが、私の決断は早かった。

完成した同作は、2017 年秋の東京国際映画祭の「アジアの未来」部門で作品賞及び国際交流基金アジアセンター特別賞を受賞！私は2018 年 3 月の第 13 回大阪アジア映画祭で同作を鑑賞し評論を書いた（『シネマ 41』105 頁）。

藤元監督の 2 作目の視線は、第 1 作のミャンマーからベトナムに向いた。その結果完成したのが、第 2 作『海辺の彼女たち』（20 年）（『シネマ 48』135 頁、139 頁）だ。企画段階のタイトルは『フォンの選択』だったが、青森を舞台とし、3 人のベトナム人女性を主人公とした物語を踏まえて、『海辺の彼女たち』に改題された同作も評価は高かった。なお、同作のチラシには「協賛 坂和総合法律事務所」と書かれていたが、それは第 1 作の出資金の返済を受けた上でそれをそのまま次回作に再出資したためだ。

それとほぼ同じスタイルの協賛で企画され完成したのが本作だ。ミャンマーからベトナムへと続いた藤元監督の第 3 作の視線は、何とロヒンギャ難民！製作プロセスは節目ごとに聞かされていたが、さてどんな映画に？そう思っていると、本作は何と 2025 年第 82 回ベネチア国際映画祭オリゾンティ部門審査員特別賞を受賞したから、ビックリ！出会いと出資から 11 年半。藤元監督はここまで大成長！



## ■ロヒンギャ難民が総勢 200 名出演する長編映画は世界初■

私は『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集 一戦後 75 年を迎えてー』を 2020 年を出版したが、ヒトラー映画は戦後 80 年の今も、ドイツはもとより各国で毎年大量に製作されている。しかし、21 世紀の今、「世界で最も迫害されている民族の一つ」と言われているロヒンギャ難民の実態を描く映画は少ない。そもそも、ロヒンギャ難民とは一体ナニ？国際問題にノー天気な多くの日本人はそれすら知らないだろう。そんな中、総勢 200 名のロヒンギャ難民が出演する世界初の長編映画たる本作が登場！

本作の INTRODUCTION には、「故郷を追われた難民の幼い姉弟が、家族との再会を願ひ、命懸けで国境を越えていく」と 2 行の紹介があるだけだ。また、STORY 紹介は

次のとおりだ。

難民キャンプで暮らす5歳のシャフィと9歳の姉ソミーラ。二人は家族との再会を願い、叔母と共に遠く離れたマレーシアへ旅立つことに。パスポートを持ってない彼らは密航業者に導かれるままに漁船へと乗せられる。自然の猛威や人身売買の危機に阻まれながらも、姉弟は過酷な道のりを必死に乗り越えていく。

そんな本作の主人公たる5歳の弟シャフィと9歳の姉ソミーラはもとより、本作の総勢200名のロヒンギャ難民の出演者は全て演技未経験者だ。そんな本作がベネチア国際映画祭のオリゾンティ部門で審査員特別賞を受賞したのは、「残酷な世界で懸命に生きるふたりが歩む希望への道が世界中から喝采を浴びた」ためだ。

本作の冒頭は、難民キャンプで暮らすシャフィとソミーラがかくれんぼ遊びをしているシークエンスから始まる。この2人は家族と共に遠く離れたマレーシアへの船旅に出るが、その前途は・・・？

### ■□■船旅の過酷さは序の口、ロヒンギャ難民の苦難は次々と！■□■

私は2025年10/4～13、ジャパネットクルーズが主催する、北海道から九州まで「感動の日本一周！クルーズ」に参加した。料金は部屋代、飲食代、観光代等すべて込みで、海側の部屋は約80万円、内側の部屋は約半額の40万円だった。私は初めて乗ったMSCベリッシマという豪華客船の豪華さにビックリ。買い物は何もしないつもりだったが、免税でシチズンやカルティエの時計を見ていると、ついつい、いろいろと購入してしまった。半年前にそんな超豪華なクルーズを体験しただけに、私は本作のスクリーンに映るシャフィとソミーラたち家族の約2週間にわたる船旅の過酷さにビックリ！

しかし、その船旅の過酷さがほんの序の口だったことが、間違って船が到着したタイ南部に上陸するところから明らかになっていくので、それに注目！私は1度だけタイ旅行をし、バタヤーで遊んだことがあるが、本作ではタイ南部の某所に降り立ったシャフィとソミーラたち家族は続いてさまざまな危険の中、陸地を歩いてマレーシアを目指すことに。しかし、その過酷さは？

### ■□■陸路の過酷さをじっくりと！家族とはぐれ2人きりに！■□■

シャフィとソミーラたち家族がマレーシアを目指すについては、それなりに斡旋業者に金を払い、日程・段取りが決められていたはずだ。しかし、スクリーンを見ていると、そもそも船の着く場所が間違っていた上、タイの南部らしき陸地に海水に浸かりながら上陸させられ、警察に追われても、それで終わり、ということらしいからひどいものだ。

タイ南部から陸路を歩いてマレーシアに向かう道でも、要所要所に“関所”のようなものがあり、そのたびに金をむしり取られるから大変だ。さらに、国境警備隊に見つかると追っかけられ、銃まで撃たれるから、そりゃ大変！そんな過酷な陸路の旅の中、ついにシャフィとソミーラは家族とはぐれてしまうことに・・・。

## ■□■中学時代に観た『禁じられた遊び』(52年)を思い出しつつ■□■

私がルネ・クレマン監督のフランス映画『禁じられた遊び』(52年)を観たのは中学生の時、その主題曲はギターの名曲中の名曲として誰もが弾き語りに憧れた曲だが、映画の内容は「禁じられた遊び」というタイトルとは異質の悲しいものだった。しかし、本作中盤に登場する、異国の地に幼い姉弟2人だけで放り出されたソミーラとシャフィの姿をみていると、私はついそんな映画を思い出すことに・・・。

本作の展開はこれからどうなっていくの?そう思っていると、森の中で2人はロヒンギヤ語をしゃべるおじさんと「遭遇」した上、そのおじさんについていくと、マレーシアを目指す別のロヒンギヤ難民のグループと出会い、そのグループの中に入れてもらえることになったから一安心!そう思ったのも束の間、夜中に金網を切って国境を渡ろうとしているところを国境警備隊に発見されたから大変。「走って逃げろ!」との命令に従って、シャフィは何とか逃げおおせたが、ソミーラの方は・・・?

## ■□■2人の子役の存在感・個性が受賞の決め手に!■□■

『禁じられた遊び』でも2人の子役の存在感と個性が際立っていたが、それは本作も同じだ。プレス資料によるとCASTの項には、「監督が取材現場で偶然出会い、その強い存在感到惹かれ主人公に抜擢された。本作が映画初出演ながら、本物の姉弟ならではの息の合った演技が、過酷な物語の中で太陽のような明るい存在感を放っている。」と書かれているが、本作中盤の過酷な陸路の旅は、この2人の存在感と個性が牽引するので、それに注目!そして、本作ラストは姉のソミーラとも離れ離れになりながら、あのおじさんのおかげでやっとマレーシアに入ることができたシャフィが更に際立った存在感と個性を放つので、それに注目!そんな5歳のシャフィの姿をみていると、ロヒンギヤ難民にも少しは希望が……。暗い暗い映画だが、本作ラストには、そんなわずかな希望を感じさせてくれる本作だからこそベネチア国際映画祭のオリゾンティ部門で審査員特別賞を受賞することができたわけだ。藤元監督のここまでの努力に拍手!



### 『LOST LAND / ロストランド』

【プレス資料 0213v】

2026年4月24日(金)よりヒューマントラストシネマ有楽町、

kino cinéma 新宿、ボレボレ東中野ほか全国公開

2026(令和8)年3月31日記